

イエス様の言行としてのわざは、人が人であり、一切の存在が存在であるための定め、それがそれであるために創られた、創造の自然を語り行っていられるのであります。

わたしたちが、そのような在りようを失ってしまつては、もはや、わたしたちとしては在りえない在りようを語り行っていられるのであります。その在りようを「キリスト」と申すので

す。
つまり、イエス様はキリストを語り行為されたのです。それゆえにイエス様はキリストなのであります。

「わたしは、父による多くのよいわざを示した」とイエス様が申されるわざは、キリストそのものを示しておられるのであります。

しかし、当時も今も、イエス様のみ見て、キリストそのものを見ない。それゆえにイエス様は申されます。「たとひわたしを信じなくても、わたしのわざを信じるがよい。そうすれば、父（神）がわたしにおり、わたしが父（神）におることを知って悟るであろう」（ヨハネ10・38）と。はたして、イエスに於てキリストが見えるか。

「わたしはよみがえりであり、命である。

わたしを信じる者は、たとひ死んでも生きる。

また、生きていてわたしを信じる者は、

いつまでも死なない。

あなたはこれを信じるか。」

(ヨハネ福音書 11章25節)

まず、このイエス様の言葉を、何度も何度もくり返し言葉してみるがよい。そうすれば、この言葉のもつ重みを、ずしん／＼と全身に感じるにちがいありません。

このイエス様の言葉は、この世の言葉ではない。この世のことにのみ目をうばわれ、この世の事にのみ思いをはせている者のうちからは、こんな言葉は出てきません。

この世の損得、善悪の価値をつきぬけた向う側に立つてこの世を見ているものの言葉。従って、この世の側に立つて何事も見て考える者にとっては、このイエス様の言葉は思議出来ない不思議な言葉になるにちがいありません。

一体イエス様は何を私達に語り示し、見せしめ、生かそうとなされるのか。この一事はとても大切なことであります。この一事について充分な領解を欠くならば、イエス様について大いなる誤解をするに止まらず、人間として生きるその生についても、ついによく自覚せずして終

るにいたります。

誤解をおそれずにあえて言うならば、イエス様は、善なる生き方とか愛なる生き方を語ることは、いわば、どうでもよかつたのであります。つまり、それがたとえどのように美しくかつ善であり、愛にみちたよきことであつたとしても、そのような日常的なこの世のことなど、どうでもよかつたのであります。

イエス様にとつて一大事は、この世のすべてが、それであることをあらしめてゐる、その一事、一点に今、現に覚めること、そして覚めて今、生きることなのです。

つまり、その一大事とは、「たとえ死んでも生き、生きていていつまでも死なない」それであり、それを今自分の脚下に確実に見ることなのであります。「なくてはならぬもの」とはこれなのであります。あなたは今、脚下に何が見えるか。

「もし信じるなら神の栄光を見るであろうと

あなたに言ったではないか。」

(ヨハネ福音書 11章40節)

イエス様は、親しい友ラザロの死をめぐって、多くの人々が悲しみさわいでいる姿を見て、
「激しく感動し、心を騒がせ」られた。

イエス様が「激しく感動され」「心を騒がせられた」とはどういう意味なのでしょう。これはよく考えてみなければならぬ大切なことでもあります。

イエス様は、ラザロの死を見て悲しみ騒いでいる人々のあさはかさ、それは、ものごとの真の事実を見通すことが出来ず、ただ目の前にあらわれた現象のみを事実だと思い込み、そのことにふりまわされているという、そのあさはかさに対して、いきどおりにもた悲しさを強く感じられたということが、ほかでもなく「激しく感動され」「心を騒がせられた」ということなのであります。

人はいつも、目に見えることからとらわれ右往左往と騒ぎたてる。そして、あらわれをあらわれたらしめ、あらわれをとおして語り示されている、あらわれの奥にある恵みの世界を全く見ず、一向に気付かない。それどころか、そのような世界があるなどと夢想だにしない。

人々は、ラザロの死は、すべての存在の消滅だと信じている。しかしイエス様にとっては、ラザロの死は死であってもその実、存在の消滅ではないのであって、それ故に、「ラザロは眠っているだけだ」(10・11)と申されるのです。

イエス様は存在の根源に立ち、そこからすべてを見、そこから発言される。しかし、人々は存在の現象にとらわれ、その移り変りに、喜んだり、悲しんだりしているのですから、イエスさまの立場から、その人の有様を見ていると実に何とも言えない、いきどおりとも悲しみとも言える思いになられるのは、けだし当然と申せます。

ですから、イエス様は、わたしが立っている世界に、あなたも立ち得るならば、ものごとの真実が見えますぞ!! と申されたのが、前記のイエス様の言葉であります。死もまた神の栄光なのである。騒ぎ立てているのはだれだ。

「その時、マリヤは高価で純粹なナルドの香油一斤をもってきて、

イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。」

(ヨハネ福音書 12章3節)

「物を受くるに心をもってし、法を受くるに身をもってする。」

これは、人がその心に銘記しておかねばならない心得の一つであります。

私たちは、物は物であって心にあらず、と思ひ込み、心は心であって物にあらず、と信じています。しかし、それは大いなる誤りであって、実は物とは心のあらわれであり、心は物によって運ばれ伝えられてゆくものなのであります。

物は物だけによって物なのだ、というふうに思ひ込んでいるのが今日の人々の物に対する考えであり態度なのであります。このような物に対する思ひ込みから、物の価値を物自身が物としてもっている自分への有用性に於てのみ判断してしまうことになるのです。

「これは自分の生活に役立つから良い」「これは、もし入手しようとするれば、とても高い金を支払わねばならぬものだからありがたい」と思う。しかし、こうした、有用性や経済性の価値基準だけで物を見ることは物を真実見たことにはならないのです。

物は心のあらわれであり、物は心運び伝えてゆく器うつわなのであります。従って、物ものは者ものであ

ると申せませす。物に者を見出す時正に者が物であることに開眼するのであります。

マリヤは香油というものをイエス様に注いだ時、それは香油という物にあらず、自分という者を注いだのであります。イエス様は、香油という物を受けたのではなく、香油に於てマリヤという者を受けられたのであります。そして、その者こそ愛であり、真実心なのであります。

しかし、そのマリヤの行為を「なぜこの香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施せなかつたのか」とユダは申します。ユダにとっては、香油はただの物以外の何ものでもないといしか見えなかつた。彼は、物を受くるに心をもつてする、という人間の大切な心得をもちあわせていながつたのです。あなたはどうか。

33

「群衆がイエスを出迎えに出たのは、

イエスがこのようなしるしを行われたことを、

聞いていたからである。」

(ヨハネ福音書 12章18節)

「山の頂を耕す一人の農夫があつた。そこを訪れる人々は山の美しさに感嘆したけれども、その農夫は山の美しさを見ようとはしない。なぜなら、彼は山と同化していたからであり、自

然を景色として、すなわち、鑑賞物としてとらえて自然の価値を落とすことをしなかったからであり、彼は身の回りの世界と合致していたからである。」

これはドイツに古くから伝わる寓話だそうです。

たしかに多くの人々は、自分の目先の損得に敏感であり、好奇心が強く、しかも、ものごとを深く考えようとはしません。

イエス様がおられた当時の人々もその例外ではありませんでした。パンのみにひかれてイエス様の後を必死になつて追う人々（ヨハネ6・25）病をいやし、死人を甦がえらせたイエス様に限りなく好奇の目を向けて集って来る人々（12・18）よみがえらされた人のうわさ話に明けくれる人々（12・9）

結局、人々は「見て見ず」「聞いて聞かず」であつて、それ故に、そのような人々は、その変わり身やまことに早いのであります。

イエス様は申されます。「どうしてあなたがたは、わたしの話すことがわからないのか。」（8・43）と。

昔も今も人々はいつも、自分の人生に於て自分を取りまくすべてを、ただ損得の目、好奇の目でのみ見てかかわり、それらのものやことがらが秘めもつ明るみの世界、命の世界、恵みの世界を、ついぞ見ようとも考えようともしないのであります。

かつてイエス様の弟子たちが、エルサレムの神殿の偉大さに驚いた持、「これら全てが見えるか。本当に言う、ひとつの石も他の石の上に残るまい。皆こわれてしまふ。」と申されました。
(マタイ24・1)

今一つの言葉が迫力をもって私に迫って来ます。即ち「人はみな草のごとく、その栄がはみな草の花ににている。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」(ペテロ第一、1・24)

友よ、見るべし、きくべし、覚むべし。

34

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、

それはただ一粒のままである。

しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」

(ヨハネ福音書 12章24節)

イエス様は表記の言葉につづけて次のように申されます。

「自分の命を愛する者はそれを失い、この世で自分の命に執着しない者は、それを保って永遠の命に至るであろう。」さらにつづけてイエス様は語られます。「もしわたしに仕えようとす

る人があれば、その人はわたしに従って来るがよい。そうすれば、わたしのおる所に、わたしに仕える者もまた、おるであろう。」と。

イエス様のおっしゃることは一見理解しやすいようで、その実なかなか理解しにくい面があります。なぜなのでしょう。それはイエス様の言葉が、わたしたちの日常生活から発せられていないからです。日常生活とは、見たり、ふれたり、食べたり、着たり……の生活であり、そこで喜んだり、悲しんだりしているわけです。そして、その生活こそ唯一自分にとって確実なところであり、事実だと信じて疑わない。わたしたちの言葉はそこから発せられているわけです。

ところが、イエス様が立っておられ、その言葉が発せられるところから見ると、わたしたちが確かだと信じて疑わない日常生活はその実、一時的であり、過ぎ去っていくものであり、その日常の生活は幻想にしかすぎなくなってしまうのです。つまり、イエス様とわたしたちとは、その立っているところ、確かだと見すえているところが全くちがうわけです。ですからイエス様の言葉が理解できないのです。

イエス様は、私達の日常生活を支えているさらにもう一つ深いところ、それは「はじめから在り、いつまでも在るところ」なのですが、そこから語り、そこを示し、そこにわたしたちが開眼することをうながされるのです。それ故に、「この世で自分の生命に執着しない者」はイ

イエスの示される「永遠」に開眼すると申されるのです。

友よ!! 己が存在のさらにもう一つ深い支えに開眼しようではないか。

35

「わたしが来たのは、この世をさばく為ではなく、

この世を救う為である。

わたしを捨てて、わたしの言葉を受け入れない人には、

その人をさばくものがある。

わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。」

(ヨハネ福音書 12章8節)

イエスは神様のご慈愛を示して次のように申されました。

「神様は悪人の上にも善人の上にも目をのぼらせ、正しい人にも正しくない人にも、雨をお降らせになる」と。(マタイ5・45)

しかし、ひるがえって人の世を見ると、そこには利害損失が、愛憎が、好悪がうずまき、さらに優劣・正邪・是非・善悪などが相互の間で言い争われ、悪は退けられ、醜はさげすまれ、弱者は泣かねばなりません。このような人の世は、まことに不条理であり冷酷無慈悲であ

ります。

イエス様は申されます。「まず神の愛がある」と。人が利害得失を考え、愛憎をその内にひめ、好悪に生きていようと、それらに、はるかに先んじて「まず神の愛がある」と。

それ故に、人は己れ自身の優劣、他人の優劣。己れ自身の正邪。他人の正邪。己れ自身の善悪、他人の善悪などを論じる前に、はるかにそれに先だつて「まず神の愛がある」ことに全身全霊をもって、みずから覚むべきなのであります。

昔も今も人々はこの一大事に全く盲目であります。この根本的な人間存在の真実に盲目なることが、人間の罪なのであります。

しかし、このような罪は決して神が罪とするものではありません。そうではなく、神のこの愛の事実がその人の前に明らかとなるに及んで、その人みずからがみずからを罪とする、即ち自らをさばくことになる。

結局人は、己れみずからの存在の根源に敵として実在する「まず神の愛がある」という事実に覚めぬ限り自己の罪にも平安にも開眼することは出来ないのであります。イエス様の生涯は、ひたすらこの一事に人として開眼せしめることにあつたのです。友よ、覚むべし。

「イエスは夕食の席から立ち上がって、

上着を脱ぎ、手ぬぐいをもって腰に巻き、

それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、

腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。」

(ヨハネ福音書 13章4・5節)

イエス様は十二人の弟子すべての足を親しく洗われた。勿論その弟子の中に、イエス様を敵に売り渡したイスカリオテのユダも含まれていました。

イエス様は、ユダが自分を敵に売り渡す約束をしていることを知りつつ、それ故にこそなお、親しくユダの足を洗われたのです。

正に、イエス様は、「神は良い者の上にも悪い者の上にも、太陽を照らし、雨を降らせ給う」といふ神の大慈愛を、身をもって提示されたのであります。イエス様は、おんねん怨念の向う側に立つて、ユダを見、つつみ給うのであります。

私たちが神に願いをかけているのではなく、神が私たちに願いをかけていて下さる。わたしたちが神を愛しているのではなく、神がわたしたちを愛して下さっている。というこの一大事を、イエス様は、ご自分の手をさしのべ、足をこぼせ、体をぶっつけて語り示されるのです。

イエス様は、弟子たちの汚れた足を、ご自分の手の温まりでつつみ、その温まりを伝えようとされる。弟子たち一人一人の心の一番奥底にまで、それを泌みとおそうとされる。一体、これほど深い語りかけがあるでしょうか。

「ありがとうございます」と手を合わせずにはおれない、うながしの語りかけを、イエス様の温い手に感じます。そしてそれを感ずるところに、宗教の世界への入口がある。否、自分が自分となり、人間が人間となる入口があるのだと思います。

「見よ!! わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであらう」(ヨハネ黙示録3。20)

友よ、語りかけがきこえるか。

37

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える。

互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、

あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うようになれば、それによって、

あなたがたがわたしの弟子であることを、

すべての者が認めるであろう。」

(ヨハネ福音書 13章34・35節)

イエス様が人々に語る愛を人は、しばしば誤解して受けとる。即ち、人々は、それを命令として受けとってしまう。人を愛せよと神は人に命じ給う、それは人に対する神のいましめであると思ひ込む。さらに人々は、それを責任として受けとる。即ち人が人を愛するのはわたしの責任であり、当然のことなのである。人が人を愛するのは神につくられた者として当然のことである、と。

しかし、右の二つの受けとり方は、イエス様が語られる「愛し合いなさい」ということを、正しく受けとめてはいない。なぜなら、それらは「自分」という「我」が、判断し、解釈し、努力して「我」の力で「命令」「責任」「当然」として受けとめ、実行しようとするからです。いうならば、「命令」は他から自分をしばる他律であり「責任」は、自分が自分をしばる自律です。

しかし、イエス様の言葉はいついかなるときでも、他律として人に迫ったり、自律的であれとは申されません。自律、他律的態度のうちには必ず、「うそ」があり、「偽善」が伴うものです。

では、イエス様が語られるところは何か。それは、神の愛に覚めた者が、それ故に、そこか

らおのずと生じるうながしの結果としての愛であります。それは、「命令」でも「責任」でもありません。おのずと生じる、自分の分としての知恵深い謙虚な愛であります。ここに、イエス様が「新しいいましめを与える」と申される理由があります。

しかし、世の多くの人々はいつも、イエス様の言葉を、「命令」「責任」として受けとることに、イエス様からついに離れる。

38

「わたしのために命を捨てるというのか。

よくよくあなたに言うておく。

にわとりが鳴く前に、

あなたはわたしを三度知らないと言うであろう。」

(ヨハネ福音書 13章38節)

「あなたのためなら、命も捨てます」とペテロはイエス様に申します。とても勇ましい言葉であり態度です。

しかし、イエス様は、このペテロの言葉を受け入れようとはなさいません。なぜなのでしょう。うか。

それは、ペテロのその言葉が、ペテロの自我、つまり我から出て来ているからです。では、

我とは何なのでしょう。我とは、自分の力にのみたよつてゐる。『われ』のことです。

自分の力量というものは決して絶対的なものではありません。強いと思ひ込んでゐる自分の力量は、その実、とても弱いのだ、ということに気づくということは、たやすいようで、とてもむづかしいことです。だが、次の事實はどのような人々も認めないわけにはいきません。即ち、人間はだれでも死ぬのだ。ということ。

死ぬということだけでなく、人間は、生きるということをも自分の力量でどうすることもできないのです。そればかりではありません。少しおながすいても、『はらだたしい気持』にさせられ、少し、『ほめられて』良い気分になり、物やお金で時として自分の主義や主張を變えることがあるのです。

イエス様は、そんなあいまいで確かでないところの、自分の力によりたのんでゐる。『われ』を受け入れられません。それゆゑに我から出て来たペテロの言葉を、そのまま受け入れられなかったのは、けだし、もっともだと申せます。

イエス様が私たちに求められてゐられることは、勇ましい、もっともらしい我から出て来る言葉や態度ではありません。

「神は碎けた悔しい心」(詩51、16・17)つまり「貧しい心」(マタイ5・3)我の弱さを自覚し、神に手を合わせる合掌の心から出て来る言葉、態度を求めておられ、受け入れて下さるの

であります。

友よ、我による信心を捨てようではありませんか。

39

「あなたがたは、心をさわがせないがよい。

神を信じ、またわたしを信じなさい。

わたしの父の家には、すまいがたく山ある。もしなかったならば、

わたしはそう言っておいたであらう。

あなたがたのために、場所を用意しに行くだから。」

(ヨハネ福音書 14章1・2節)

イエス様は表記の言葉につづけて次のように申されます。「そして、行って、場所の用意が出来たならば、また来て、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」と。

人が生きるということは、思いわずらいの日々を生きる、ということでもあります。いうなれば、思いわずらいは生きていることの証拠のようなものです。それ故に、思いわずらいは止めるわけにはいきません。イエス様は、思いわずらいを止めなさい、と言っておられるではありません。そうではなくて、思いわずらいの中で思いわずらう。つまり、自分の中でひとり

思いわずらうことを止めて、神の恵み、イエス様の愛の中で思いわずらいなさい。と申されるのです。それは、母の愛情豊かなうでの中で泣く赤子と同じであり、泣いていても平安であり、平安の中で泣いているのです。

信仰人とそうでない者との思いわずらいの異なるところは右の一点にあります。

それ故に、信仰の先達は次のように語るのです。

「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、一切神にゆだねなさい。」(ペテロ第一、5・7)

「いつも感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることが出来ない神の平安が、あなたの心と思いを、守るであろう。」(ピリピ4・6)

イエス様が申される「わたしのおところ」とは、ほかでもなく、「人知ではとうてい測り知ることが出来ない神の平安」の場であり、それが満つるところであり、即ち安心して、その上で思いわずらうところではありません。

わたしたちはどこで思いわずらっているのだろうか。

「神は特別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共に
おらせて下さるであらう。それは真理の御霊である。

この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないで、
それを受けることができない。」

(ヨハネ福音書 14章16・17節)

イエス様は申されます。「肉から生まれる者は肉であり、霊から生まれる者は霊である」(ヨハネ3・5)と。また、使徒パウロは申します。「肉に規定されている者は肉のことを思い、霊に規定されている者は霊のことを思う」(ロマ8・5)と。そして、パウロはつづけて申します。「肉の思いは死であり、霊の思いは、いのちと平安とである」と。これほど明解な事実の説明は他にありません。だれも、この事実の説明に対して一言半句の反論もいわず許されません。

わたしたちが、いかほどに肉の目を開いて見ても、しよせんは肉以上の世界は見ることは出来ません。肉の目が見る世界は、しよせんは、うたかたの幻想の世界であり、すべては去りゆき、消えゆくのであります。なぜ人々は、この厳粛な事実を目覚めないのでしょうか。それは、おそらく、霊を知らないからであります。

では、霊とは何でしょう。真理の御霊であります。真理の御霊とは何でしょう。それは、人をして真実に開眼せしめる生命そのものの働きであります。

霊とは pneuma であり、pneuma とは息きであります。息きをしているということは、生類には一般的な生理現象であり、生きている営みであります。命の営みそのものであります。その息きをととのえる時、人は正に全宇宙の生命に同化し、我れもなく、ひとみなき生命そのものの根源に自覚的に立つのであります。ですから、人は霊によって真実マコトを知るのです。(1コリント 12・3) そのとき神と人との関係もあらわとなる。(ロマ 8・9、14、17)

さらに霊は、霊自身によって人を人へと導きうながすのです。(ロマ 8・26、1コリント 2・10、16)

しかし、肉にしばられた者には、聖霊の語りかけは、聞こえない。

「わたしは、あなたがたを捨てて孤児とはしない。」

(ヨハネ福音書 14章8節)

「孤児」とは、頼るべきものが全くない子ども、ということですが、つまり、養ってくれるもの(親)がないということです。

しかしイエスさまは申されます。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児としない」と。わたしたちが、死んでも生きて孤児としない、と申される。なんと、ありがたいことでしょうか。

「孤児としない」とは「わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、わたしがあなたがたにおる」ことであります。(14・20)

右のイエス様の言葉を、よくよくかみしめてみるとよい。そうするとき、「孤児としない」ということは、結局、イエス様が共にいてわたしたちの世話をしてくださるとか、愛してくださるとかではなく、神のいのち、イエスさまのいのちとわたしのいのちが一つになる、ということとであります。

イエス様は、神とイエス、イエスとわたしたちの生きるさまの奥義を、ヨハネ福音書一五章で、ぶどうの木とその枝と農夫とのたとえで、わかりやすく示して下さいました。

さらに、使徒パウロは、神のいのち、イエスのいのちにわたしたちが一つとなって生きる

姿を、自分自身の生きている体験にもとずいて、次のように語っています。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」(ガラテヤ 2・20)。また「あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されている」(コロサ イ3・3)とも申します。さらに「キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認めるべきである」(ロマ6・11)とも申します。

このありがたき神のご慈愛をわたしたちに明らかに開き示してくださるのが、実は「聖霊」の働きのなであります。(14・26) そのとき、神の平安、キリストの平安がわたしたちの魂のうちに現成してくるのであります。この平安を土台として歩む人は、本当の意味で「孤児」ではないのです。

42

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」

(ヨハネ福音書 15章5節)

枝は幹から生ずるのであって、決して枝から幹が生まれるものではありません。この順序は絶対に逆にはなりません。この当り前の事実、わたしたちは今一度しっかりと目を向けて、表

記のイエスさまの言葉を聞くことが大切です。

しかし、一本の樹は幹だけであるのではなく、樹とは、幹と枝とによって樹なのであります。（勿論、根・大地等も含む）つまり、枝は枝のみによって枝に成るのではなく、一方幹は幹のみによって幹になるのでもありません。即ち、樹は幹と枝との独立した関わりに於て、はじめて樹になるのであります。したがって、幹は幹でありつつ同時に樹であり、枝は枝でありつつ同時に樹なのであります。

一体、イエスさまが、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。……」と語ることによって、いかなることを私たちに示されたのかということ、よくよく考えてみなければなりません。

イエスさまが示されるところは、あなたは、あなたのみによってあなたなのではなく、わたしにかかわることによってあなたになるのだ、ということ。したがって、あなたは、わたしと一つなのだ、とも申されるのです。

ですから「人がわたしにつながっており、また、わたしがその人とつながっておれば、その人は実を結ぶ。わたしから離れては、あなたは、何一つできない」（15・5）と申されるのです。

人は、もともと人自身の命で生きられません。神の命に生かされることにより人は生きるの

です。神の命が人の命となり、人の命が神の命となる。この命への自覚に生かされることが、「わたしの愛のうちにいなさい」(15・9)ということなのであります。

この命の自覚に生きようとする求道の姿を次のようにある人は申しました。

但着花開落・不吉人是非 (但、花の開落を見て、人の是非を言わず)と。

「わたしの愛のうちにいなさい」と申されるイエスさまの示しを、今耳をすまし、目を開けて受けとめたいと思います。

43

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

もし人がわたしにつながっており、またわたしが

その人とつながっておれば、その人は実をゆたか

に結ぶようになる。」

(ヨハネ福音書 15章5節)

表記のイエスさまの言葉が示すところは、樹に於ては、幹と枝とが不二であり、一体であるということであります。つまり、幹と枝とは別々に異なる生命によって生かされているのではなく、共に一つの生命に生かされているのであるという事実を示しているのであります。この

ことは、人が根本に於てイエスさまをイエスさまとして生かしたその生命に、共にあずかり生かしめられているのだという、わたしたちの存在の事実を明らかに教え示しているのです。このような人の存在の事実についてパウロは次のように言っています。即ち「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(ガラテヤ 2・20)と。

パウロは自分の生命の主体はキリストさまです。と言っているのです。また次のように言っています。即ち「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られたのである」(コリント第二、5・17)と。これは、人がキリストの生命に生かされているという事実が目覚めるなら、その時人は、自分は自分によって生きているのだという傲慢で馬鹿げた思いあがりで、その実全く弱い考えから解放されて、全く新しい生命のかがやきの世界の現実を見るに至る、ということを語っているのです。それ故に、先の言葉につづけてパウロは、「古いものはすぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」(5・17)と云うのです。

さらにパウロは「死ぬべきものが命にのまれた」(コリント第二、5・4)と言ひ、具体的には、「よみがえりの生命にあずかる」(コリント第二、4・14)ことであり、「キリストにあって神に生きている者」(ロマ 6・11)であると申します。

わたしたちは今、自らの魂の目を大きく見開いて、自分自身が生かされている生命の根源の

事実を確認させられたいと思います。その時、人は本当に新しくなるにちがいありません。

44

「あなたがわたしを選んだのではない。わたしが

あなたがたを選んだのである。」

(ヨハネ福音書 15章16節)

「わたしが、あなたを選んだ」とイエス様は申されます。これは何と力強い言葉でしょう。わたしたちは、今のこの時代に、この国の中に、人間として、神さまに感謝できる者として生かされているのです。これはとてもありがたいことです。

神様のお恵みを知ることとは、生きるということを受身に考えるようになる、ということです。つまり、生きていくということが、生かされているということになり、得るといふことが与えられているということになるのです。さらに、するということ、させてもらっている、ということになるのです。このように、一事が万事受け身にさせられると、すべてが「ありがたく」なってくるものです。そして、そのありがたさが、うれしさにかわり、安心へととなり、最後に力強さになってゆくのです。

本当の力強さというものは、誰にも頼らず、誰も信ぜず一人で前進してゆくことのように思う人がいますが、それは大変な思いちがいをしている人です。

よくよく考えて自分の日々を見ると、しよせんは、自分よりもはるかに大きな命のいとなみがあって、その中で、わたしもあなたも「ゆるされて」生きているものなのです。そんなことに少しも気づかず、「生きているのだ」「生きて行くのだ」と、ひとり力りきんでいる人は、決して力強く生きているとは申せません。むしろ、はなはだこっけいな姿だと思ふのです。

多くの人は自分（我）ということを中心にして世の中を見てしまいます。だから、自分が生きていると思ひ込むのです。大切なことは、自分よりも、さらに世の中よりも大きい命のいとなみを見て、そこを中心にしてすべてを見ると、人は必ず、世の中の前では、生きています。生かされているのだということが、発見出来るにちがいません。

もういいかげんに、こんな当り前のことに人々は目覚めるべきだと思いますが、どうでしょうか？

「わたしがあなたがたをこの世から

選び出したのである。」

(ヨハネ福音書 15章19節)

表記のイエスさまのお言葉を聞いていて、またもや、次の言葉を思い出しました。

但^レ看^ニ花^ノ開^ク落^ク不^レ言^ニ人^ノ是^レ非^ト

いうならば、人の是非を語り論じてすごすのが、この世というものでありましょう。

この世は「肉の働き」で満ち満ちています。これについてパウロはガラテヤ書で次のように語っています。

「肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、常派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。このようなことを行う者は、神の国をつぐことがない。」(5・19)

たしかに、この世はパウロが言うところの「肉の働き」を行うことに余念がなく、「名利と愛欲とは人間の骨身であり血液である」と申せます。

しかし、人が正にまぎれもなく自分の現実だと信じて疑わないこの世の底に、これこそ真実現実であるという現実が、光りかがやいて在るのであります。その現実こそ、ほかでもなく、

「花が開落する」現実そのものであります。

「花が開落する」現実とは、まぎれもなくお恵みの世界そのものであり、神のご支配の世界であります。

わたしたちはこの世に沈んでいる者であります。この世にしがみつき、やがてこの世の中で空しくくちはてて行く者です。(エペソ2・12、Iコリント7・31、IIコリント7・10)

しかし、イエス様は、この世の現実から、今一つの真の現実、まぎれもなく足下にある恵みの現実には、わたしたちを開眼せしめ、覚めさそうとされる。これこそが、「この世から選び出す」ということなのであります。(ヨハネ3・17、6・23)

今、静かに「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。」とお語りになるイエス様の言葉(マタイ6・25〜)に耳をかたむけたく思います。

「わたしは、自分から何事もすることができない。
ただ聞くままにさばく(判断する)のである。」

(ヨハネ福音書 5章30節)

これは不思議な言葉です。しかし、よくよく聞きつづけると、なるほど、そのとおりであると領解されてくる。

イエスさまは「自分から何ごとも」されなかった。自分からとは、自我からということであり、我からということです。

「ただ聞くまま」とは、何かの聲が他から語りかけて来るものではありません。そうではなく、自然に自我にひびいてくる声、つきあげて来る迫りとも言えるそれなのです。

人を殺してはならない、ということとは法律のことではありません。それは法律として禁止される以前に、人が自然に吾が内に聞こえて来る声なのです。

人の激情は、この声をかき消し、自我はさまざまな理由をつけてこの声を否定します。

内からつきあげ迫って来るその声は、良心の声以前の声であり、宗教以前のそれであり、勿論道徳以前のそれです。つまり、一切の人の反省以前、意識にのぼる以前の声なのです。「自分から」以前のそれなのです。その声は、はじめからあり、終わりまである永遠の声なの

です。即ち、「語らず、言わず、その声きこえざるに、そのひびきは全地にあまねき。その言葉は地のはてにまでおよぶ。」（詩19）それなのです。

人はすべてその声につつまれて、いつもあったのであり、ありつづけるのであります。この事実はいかなるもの、いかなることより確実なのであります。そのことに素直に自然に在ることが、ほかならぬ「創造に於ける人間の自然」なのであります。

しかし、人は自我を立てることにより、その自然性をゆがめてしまい、不自然な状態に成ってしまった、このことが罪ということであります。

イエスさまは、その創造に於ける自然を生きた方、それを聞いた方、それを、「聞くままに」生きた方です。友よ、その声を聞いたか。

47

「聖霊がきたら、罪と義とさばきとについて、

世の人の目を開くであろう。」

（ヨハネ福音書 16章8節）

わたしたちは、いつも我に生きている者です。つまり、自分が見たり、ふれたり、考えたりすることだけが、確かなことと思ひ込んでいます。

人の争いはいつも我と我がとのぶつかりあいから起って来ます。それぞれが自分が正しいと確信し、それをおし通そうとする。考えてみると、我とは自分を正しいとしたいという欲であると言えます。

ですから、ヤコブは申します。「あなたがたの中の戦いや争いはいったどこから起くるのか。それはほかでもない、あなたがたの欲からではないか……」(4・1)と。

人が我欲にふりまわされていると、まことなるものが見えてこない。「見るには見るが見えず」とイエスさまは申されます。

わたしたちを我のとりこから解放させてくれるのは何か、これこそが宗教であります。そして、その働きをおしすすめてゆくのが神の力であり、神の知恵であります。それを聖書は「聖霊」と言っているのです。その聖霊がわたしたちに働くとき、次のことに開眼させられます。

一つは罪についてです。罪とは神さまのお恵みのもとにあって生かされているにもかかわらず、我をはって、それに気づかないことです。

二つには義についてです。義とは神と人との関係、人あって神でなく、神あって人ということ、つまりすべての在り方の真実のことです。

三つには、さばきについてです。つまり、終わりがあるということです。

結局、聖霊は人に人の在り方を示す助け主なのであります。

わたしたちは今、人らしくなるために、聖霊の助けにより、我をのり越え、神のお恵み、神の知恵にあずかりたいと祈るうではありませんか。

48

「真理の御霊が来る時にはあなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたに知らせるであろう。」

(ヨハネ福音書 16章13節)

真理の御霊とは、まことなるものが見えるようになることを、うながす神の働きかけであります。

真理の御霊が人のもとに来るとき、人は、自分から語るのではなく、その聞くところを語るイエスさまは申されます。

このイエスさまの言葉を聞いて、わたしは一つの言葉をおもい出した。それは、「聞くは行まこと聞こえるは信」です。

一体全体、真まことなるものは、聞こう聞こうと努力しても、実は聞くことは出来ないものです。

まこと
真なるものは、自然に聞こえてくるものなのです。また、真なるものは、見よう見ようとして努力しても、実は見ることは出来ぬものです。まこと
真なるものは、自然と見えて来るものなのです。

自然と聞こえて来る、自然と見えてくると申しましても、何もしないでそうなるということではありません。

自然と聞こえ、自然と見えて来るためには、我で力むことを止めることです。素直になることです。そうすると、そのものがそのままに自然と見え、聞こえて来るようになります。例えば、生まれる時が来たら生まれ、死ぬ時が来たら死ぬ、これが真実というものです。平安というものです。幸いというものです。痛い時に痛いといい、悲しい時には悲しいという、これが平安というものです。素直というものです。そこで人は真理を見出すのです。

ニュートンという人は、リングが木から落ちるのを見て、地球の引力を発見したと言われていますが、これもニュートンの素直さのなせるわざと申せます。

御霊とは素直な思い、こころのかたまり、働きでもあるのです。わたしは素直だろうか。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、
また、あなたがつかわされたイエス・キリストを
知ることあります。」

(ヨハネ福音書 17章3節)

花は、黙って咲き、黙って散って行く。

そうして再び枝に帰らない。けれども、その一時一処に、この世のすべてを托している。

一輪の花の声であり、一枝の花の真である。

永遠にほろびぬ生命のよろこびが、悔なくそこに輝いている。

(柴山全慶)

花無心ニシテ蝶ヲ招ク

蝶無心ニシテ花ヲ尋ヌ

花開ク時蝶来リ

蝶来タル時花開ク

(良寛)

花はなぜ美しいか

ひとすじの気持ちで

咲いているからだ

(八木重吉)

右の三つの詩を幾度も幾度も言葉するとき、深い深い平安が見えて来ます。

ここに見えて来る平安とは何なのでしょうか。一口に申しますと、我が無いということ、貧^{ひさま}ばりが無いということ、執^{とら}れがないということでしょう。ここには力^{りき}みがない。そのものをそのものとして見ている。そのままが、そのままであるということです。凡夫は己にまかせ、聖人は物にまかせ、という一句をおもい起こします。

今の世は、あまりにも内も外も騒がしい。人にとって、どうでもよいことが一大事となって、人々を翻弄^{ほんろう}(ほんろう)し、その波間で人々は喜び、悲しみ、誇り、恥じる。まことに、「命にいたる門から入るものは少なく、見出すものも少ない」(マタイ7・13)

人はすべて、先ず死を習って後に他事を習うべきであります。

「わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜った人々に、
 名前をあらわしました。」

(ヨハネ福音書 17章6節)

神様のご慈愛に目覚めるとき、人は自分の生活のすべてを受身に考えるようになります。即ち、「わたしがした」ことが、「わたしはさせていたのだ」となり、「わたしが生きている」と思い込んでいたのが、「わたしは生かされているのだ」というふうになります。

これは、神様のご慈愛が、すべてのもの、すべてのことに、先ず、あまねくおよんでいるという事実が見えてくるからです。

その神のご慈愛が見えてきた、そこから、こんどは、見えるようになった自分を見ると、も早「自分が神のご慈愛を見た」のではなく、「神のご慈愛を、わたしは見させていたのだ」ということになるのです。「なんと、ありがたいことであろうか」と、おのずと合掌させられるようになるのです。

そのようなことが人々のうえにおこるとき、「あなたが、わたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだのである」というイエスさまのお言葉が、そのまま素直に合掌して受けとり、聞きとることが出来るようになる。

世間には、「この世を救わねばならぬ」と、非常に力んでいる宗教者、信仰人がいます。しかし、大切なことは、この世を救うことではなく、この世から救われる、ことが第一ではないかと思うのです。

この世の人々が、神のご慈愛により、自分は、この世から選り出され救われたのだ、ということを実感するとき、実は、この世が救われるのであります。

ただ、神は愛だ、神は愛だ、と言っているだけでは、何ごとも生じません。

51

「わたしがお願いすることは、

彼らを世から取り去ることではなく、

彼らを悪しき者から守って下さることです。」

(ヨハネ福音書 17章15節)

イエスさまは、「悪しき者から守って下さい」と弟子たちのために祈られました。

一体「悪しき者から守る」とは、どういうことなのでしょうか。

「悪しき者」の悪しき者たるゆえんは何かと申しますと、分裂せしめるということです。ただし、人と人との分裂ではなく神と人との分裂ということです。即ち、人が神の内に在り、神

が人の内にあるという、この明確なる現実から、人の思いを逸らせ、人は人によって在り、自分はその内にあるという、この明確なる現実から、人の思いを逸らせ、人は人によって在り、自分は自分のみによって現在するのだと思ひ込ませること。これが「悪しき者」の悪しき者たるゆえんであります。

イエスさまが、その全存在をかけて語り示した一点は、人は決して人自身によって立っているのではない、ということ。人は神の命によって人たり得ているのだ、ということ。しかしが世のものではないように、弟子たちも世のものではありません」と。そしてさらに、つぎのように祈られます。「人々を、わたしのうちにおらせて下さい」(21・24) 「神とイエスが一つであるように、人々も一つにして下さい」と。(23) そして、「あなたが、わたしを愛して下さったその愛が彼らのうちにあり、また、わたしも彼らのうちにおるためであります」(25) 神の愛のうちに在るといふことの開眼は、神の命に在るといふことの開眼であり、さらにそれは、神と人が一つであることの開眼であります。そして、神と人が一つであることの開眼は、人と人が一つでなければならぬといふことの自覚へと人をうながします。

イエスさまは、ただ人が無事安全に日々を過ごすことを願っているわけではありません。イエスさまの願ひは人が神の命に現に生きていることに開眼することにあります。

友よ、あなたの足下に神の愛がある。

「剣をさやに納めなさい。父がわたしに下さった杯は、

飲むべきではないか。」

(ヨハネ福音書 18章11節)

弟子の一人ユダの裏切で、イエスさまは当時の政治的、宗教的権力者たちによって捕えられます。捕えにきた者たちに、弟子の一人が剣で立ち向かおうとしたとき、イエスさまが弟子をたしなめられて語られた言葉が、表記の聖書の言葉です。

マタイによる福音書によると、「剣をとる者はみな、剣で滅びる」(26・52)と申されて、イエスさまは弟子をたしなめていられます。これらのイエスさまの言葉は、一体どこから出て来て、何を人々に示しているのでしょうか。

イエスさまの言動は常に、人間存在の基本を見て、そこから言葉され行為されます。その人間存在の基本とは、わたしとは即ちあなたである、ということことです。いいかえると、あなたが在ってわたしである、という人間存在の基本的な在りようです。

わたしはあなたから見ればあなたなのです。と同じように、あなたといわれるわたしは、わたしから見ればわたしなのです。つまり、あなたとわたしの関係は、わたしとわたしの関係であると同時に、あなたとあなたとの関係でもあるのです。

このようなわたしを反省して、はっきりすることは、先述のごとく、わたしは即ちあなたなのである。ということです。それは、とりもなおさず、あなたとわたしは別々な在り方をしているけれども、決して別々ではなく、その存在の基本に於ては同じである、一体である、一つであるということなのであります。

この一つであることに目覚めることが、愛に目覚めることです。従って愛とは、一つであるという人間存在の在りようの姿であり、形であると申せます。

剣は、この人間存在の基本的在りようを、切り裂くものです。それはとりもなおさず、わたしであるあなたを切りさくもの、即ち、わたしを滅ぼすもの、人間を人間たらしめる在りようを滅ぼすものです。故に「剣をおさめよ」とイエスさまは申されるのです。

53

「シモン・ペテロは、立って火にあたっていた。

すると人々が彼に言った。

「あなたも、あの人(イエス)の弟子のひとりではないか」。

彼はそれをうち消して

「いや、そうではない」と言った。

(ヨハネ福音書 18章25節)

「智者も善者も浮世を見るに色と金には皆迷う」これは白隠の草取り唄の一節です。

この唄は一般論ではありません。実に、わが身のことです。

「人間の心の奥の奥の院を開いてみれば鬼が本尊」と言った人がいます。この鬼とは、「我慢と我愛の牙をもって生きている自我」そのものです。

愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して……と親鸞は己が心の内を告白します。これは一つの金言名句ではありません。事実なのです。わがことなのです。どうにかなることではなく、どうにも、こうにもなすことが出来ない、わが身の事実なのです。

信仰に於て質実剛健を自他ともに認めるペテロも、このすさまじいわが身の鬼に出会って、全くの形なしの悲しい姿を露出し、己が身をふるわせて泣きふすのみです。

ペテロは三度もイエスなどという人は知らない、と言います。その三度目のペテロの言葉を、
「ペテロは、次のように記しています。「そんな男は知らない。これが嘘なら、呪われてもよい。と幾度も呪いをかけて誓った」(マタイ26・74) (塚本虎二訳 岩波文庫) これが、わが身の現実なのです。罪とは言葉ではありません。現実のわが身の事実なのです。これが我の現実なのです。この我をのりこえる手は、わが身にはない。知性も情性も意志の力も、我の前には全く無力です。

それゆえにこそイエスさまは申されるのです。「すべての重荷を負って苦勞している者は、

わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ11・28)と。このイエスさまの言葉に、鬼のわが身を投げ込むのです。投げ込んだところから生かされるのです。そこが「一日の苦勞は一日でたりる」(マタイ6・34)深信の生です。本当に鬼のわが身を投げ込んだか。

54

「わたしは真理についてあかしをするために生まれ、

また、そのためにこの世にきたのである。

だれでも真理につく者は、わたしの声に耳をかたむける。」

(ヨハネ福音書 18章37節)

表記の言葉は、イエスさまが、ローマのユダヤ総督ポンテオ・ピラトに向って語られた言葉です。このイエスさまの言葉に対して、ピラトは、「真理とは何か」と問い返しました。一体、イエスさまが語り示される真理とは何なのでしょうか。

聖書が用うる真理という言葉には「真相」とか「ありのまま」とかいう意味があります。これは、ものの在りようの「ありのまま」「真相」のことであって、いかなるものにも「おおわ

れていない」ことだと言えます。

ところが、わたしたちの日々は、実は、我^がというもろもろの思いで、すべてをおおって生きていきます。見るにも、考えるにも、欲するにも、いつも我^がが基本にあって、おしすすめて行きます。言うなれば、我^がという色めがねをかけて、ものごとを見て判断し行為しているわけです。ですから、すべてものごとが、「ありのまま」に見えるはずがありません。(マルコ7・20と22、ガラテヤ5・19と20、マタイ13・14と15)

では、「ありのまま」であるという真理とは何なのでしょう。実は、イエスさまは、この真理を生きられたのです。「わたしは真理である」(ヨハネ14・6)と申されましたが、「ありのまま」である真理は、語って説明すべきことではなく、ひとりひとりが体験的に信知すべきことから、事実、現実なのです。ですから、イエスさまは決して説明されないのです。

イエス様は真理を、ご自分の生きる様^{さま}で語り示し、「見るべし」「聞くべし」と申されます。

*

イエスさまは真理を語られ、真理を生活された方です。

真理とは、「ありのまま」という意味があると先に申しましたが、一体、「ありのまま」と

は何なのでしようか。

「ありのまま」とは、ものごとの「ありてい」のことです。

イエスさまは、山上の教えの一節で次のように申されました。「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる」(マタイ6・26)と。

つまり、イエスさまが申される鳥の「ありてい」は、「天の父に養われている」ということです。そして、この現実には、ただ、鳥に限らず、花に於てそうであり、さらに人間に於ても同じだ、とイエスさまは申されます。(マタイ6・25と30)そして最後に、「ありのまま」の現実を「神の国・神の義」(マタイ6・33)と申されます。神の国とは、いつも申しますように、神のご支配、神のご慈愛のおよぶところ、という意味です。

この世のありとあらゆるものすべてが、わたしもあなたも含めたすべてが、神のご慈愛にいだかれて成り立っているのだ、というこの現実の「ありのまま」に目覚めなさい、とイエスさまは申されるのです。

イエスさまが教えて下さった祈りの一節に、「天にまします、われらの父よ。御名を崇ませ給え」というのがあります。これは、「わたしたちが、先ず、神のご慈愛によって生かされ、生きている現実に、しっかりと目覚め、それにもとずいて、他の一節の生活をする者となれます

ように」という祈りなのです。つまり真理とは「ご慈愛の現実」のことだったので。
では、それは具体的にどのようなようにあるのでしょうか。

*

わたしたちは、生活していくうえで多くの願い、つまり祈りをもっています。例えば、健康でありたい。生活が物心両面で豊かでありたい。立身出世をしたい。人々から好かれたい。…… 数えあげればきりがありません。

ところが、イエスさまは、わたしたちが生活してゆくうえで、願い、祈らなければならないこととして、いくつか教えて下さいましたが、その第一にあげられたことは、「御名があがめられますように」ということです。

この祈りの意味するところは、すでに先に申しましたとおり、「わたしたちが、神さまのご慈愛のうちに生かされ、生きている現実には、まず第一に目覚める者として下さい」ということ
であります。

つまり、イエスさまは、わたしやあなたの幸福と平安とは、わたしやあなたが、先ず第一に神さまのご慈愛のうちに生かされ、在らしめられている現実気づくことである、と申されるのです。

では、わたしたちが気づくべき神さまのご慈愛の現実とは何なのでしょうか。それは、言うなれば「間」に気づく、ということとです。例えば、人が「間」に気づくとき、その人はようやく「人間」になる事が出来るのです。その理由は次のように説明することが出来ます。即ち、「わたし」は、わたしによって「わたし」なのではありません。「わたし」は、わたし以外の多くの人々の間に在ってこそ「わたし」なのであります。「わたし」であることが出来るのは、わたし以外の多くの人々が「わたし」にしてくれたのであります。親、兄弟姉妹、友人、先生、近所の人々、色々なものを造って下さった人々。それらを数えあげれば無数にあげることが出来ましょう。それらの人々の間に在って、「わたし」は育てられたのであります。

*

人は、自分という者が、人と人との「間」にあるものであると気づくとき、はじめて人間になるのだ。ということを先に申しました。

したがって、人間性が豊かになるということは、その人が、自分は自分一人で人間としてあるかのように思い込んでいる誤りに気づき、自分は自分以外の人さまとの、さまざまに関わりのおかげで、はじめて、自分は自分であり人間として在ることが出来るのだという自分の存在の人間性に気づくことであります。

人が、人と人との間にあることによって、はじめて人間となる。という事実は、もともとどのように定められている事実であり、現実なのであります。つまり、この事実、現実が、わたしたちの「ありのまま」即ち、事実であり、真理なのであります。この真理は、人間が自分勝手に弄する理屈ではありません。そうではなく、自分という者を素直に見たとき、常人ならば誰れもがそれとわかる事実なのであります。このあまりにも人間にとって当たり前の事実を、ありのままに、ありのまますべての人々が領解しているか、というと、実はそうではないのです。

世の多くの人々は、「まず自分があり、それとは別に他者がいて、然るのちに、いろいろな都合で関わり合うのだ」と思い込んでいるのです。つまり、自分は自分で他人は他人、利害がなければ無関係。従って他人がどうなろうと知らぬ、と思う。ここに、人間のありのままを認めない人間の罪があるのです。

とにかく、イエス様は「真理についてあかしをするために来た」と申される真理とは、この人間のありのままの事実のことなのであります。

*

一般にキリスト教は愛の宗教であると言われますが、何をもって愛の宗教だと言われるので

しょうか。それは、神さまがイエスさまに於て愛を示して下さったからだと言われています。即ち、イエスさまはわたしたち人間を救うために、ご自分を十字架刑に渡されたことが愛であるということです。

たしかに、現象的にはその通りです。しかし、イエスさまが人々を救うために自ら十字架におかかりになった、ということはほかでもなく、人は一人で人たり得ない、人は他者のために己れを捨てることによってのみ、相互に人たり得るのだ、という人の根源的な在りようを示しているのです。つまり、人が自分のことにのみ配慮をして、他人はすべて自分のためにあるのだと思ひ込み行動するならば、結果は必ず、自分も他人も共に亡んでしまいます。正に戦争はその典型的な一つの例であります。

ここで、先に申しました、人間は、人と人との間、物と物との間、人と物との間の存在であり、そのことに自覚するとき人間は、はじめて人間になるということを出していただくたい。人が自分は間にある存在なのであり、間に生きてこそ、人間となるのである、と気づくことは、これ即ち、その人が愛に目覚めたということです。

愛とは、自分の在りようが間に在る者なのだということであり、それに目覚めることなのです。イエスさまは、そのような人間存在のありようを、ご自分を十字架につけることによって、

具体的にお示しになったのです。そして、そのことを極端に語りお示しになった言葉が、「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネ15・13）であります。

*

パウロは、コリント第一の手紙13章で「愛」について語っています。

「愛がなければ、すべては空しい。たとい、自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさい無益である」と。そして、「信仰・希望・愛の三つのうちで最も大いなるものは、愛である」と結んでいきます。

しかし人は言います。自分の全財産を他人のために施すことは、即ち愛ではないのか。ましてや、他人のために命をすてること自体、愛ではないのか、と。たしかに、それはすごい行為であって、誰れにでも出来ることではありません。だが、人は、自分の思いを遂げるために、全財産さえも、さらに自分の命さえも、すててかえりみないこともあるのです。即ち、問題は、我という思いから、その行為が出て来ているのか、それとも、先に述べてきたところの「間に生きる者としての人間の自然を自覚的に生きるところから、出て来た行為であるのか、ということです。

我をおし通すための行為か、それとも、人間存在の基本的な在りように、うながされての行為であるのかということ。この一点は、とても大切なところなのです。人間が人間になれるかどうか、という大切なところなのです。

世にある「主義」「主張」「信念」これらは皆、我の産物であります。倫理、道徳的努力も同じ我の産物です。そして、パウロの言う「律法の行ない」（ロマ3・28、ガラテヤ2・16）も我の産物であります。イエスさまは、我による努力を「重い荷物」（マタイ23・4）とされるのです。

そして、人間存在の根本的在りうながされてする行為を、「御霊によって」とパウロは申しました。（ガラテヤ5・16）さらに「キリストによって」ということも同じです。（ピリピ3・12）

*

わたしたちはいろいろなものに執とらわられています。

イエスさまは申されます。「不品行、盗み、人殺し、姦淫、欲張り、悪意、悪巧み、道楽、妬み、悪口、高ぶり、愚かさなど、これらの悪は皆、内から出て人をけがすのである。」（マルコ7・21〜33）と。「内から出て人をけがす」とは、さしずめ「我が人を執とらえて、人をだめにす

る」ということでしょう。

「知者も善者も浮世を見るに、色と金には皆迷う」と唄った白隠が言う「色と金」とは、我欲に執られた人間の悲しい事実を言っているのです。また「煩惱嫌うて菩提がすきじゃ。すきも嫌いも皆煩惱よ。」と言ひ、「善じゃ悪じゃと目に立つ内は、恥じて修行を精出しやれ。」さらに、「心一つを悟りて見れば、こうじゃそうじゃの音もなし」と白隠が言う境地こそ、イエスさまが申される「明日のことを思いわずらうな」「神の支配に生きよ」ということであり、「真理」「ありのまま」に生きる生のことにはほかなりません。

イエスさまが申される「真理」とは「ありのまま」のことであると先に言ったことを思い出して下さい。即ち、イエスさまが申される「人をけがす」とは、この「ありのまま」にさせないことであります。「ありのまま」の世界は神のお恵みが充ち充ちている世界です。その「ありのまま」に立つとき、「死ぬも目出たい、生きるも目出たい」と安心できるのです。そして、神のお恵みに充ち充ちている世界に立つことを、パウロは「キリストのうちに自分を見出す」(ピリピ3・9)と申しました。キリストとは、「ありのまま」の世界のことであつたのです。イエスさまは、「ありのまま」を「ありのまま」生きられたのでイエスはキリストを生きられたのです。

「そこでピラトは、十字架につけさせるために、

イエスを彼らに引きわたした」

(ヨハネ福音書 19章16節)

ローマのユダヤ総督ポンテオピラトは、イエスさまがローマの律法によっては、罪人に当たらないことをよく知っていました。(ルカ23・14) 加えて、イエスさまを訴えたユダヤの権力者たちが、正当な理由をもたず、ただ自己の権力を保つための暴挙であることも知っていました。

(マタイ27・18) マタイによると、ピラトの奥さんまでが、イエスさまの件からは手を引くように夫ピラトにすすめています。(マタイ27・19) そして、ピラトはピラトなりにイエスさまを赦そうと努力します。(マタイ27・15、マルコ15・6、ルカ23・4)

しかし、結局、ピラトはイエスさまを十字架につけることに同意してしまいます。ピラトをそこまで追い込んだものは何だったのでしょうか。ルカは、ユダヤの権力者におどらされた民衆とピラトの決定的なしゅんについて次のように記しています。「彼らは大声をあげて詰めより、イエスを十字架につけるように要求した。そして、その声が勝った。ピラトはついに、彼らの願いどをりにすることに決定した……(ルカ23・23、25)

政治家に理想はあっても、政治には理想などありません。政治にあるのは現実だけです。こ

れが、政治のもつ矛盾でありアポリアであると言えます。

「その声が勝った」という「その声」とは何なのでしょう。それは実体のない幻想にしかすぎないものなのです。にもかかわらず、此の世の人々であればあるほど、それを恐れ、それを最も重宝なものとして自己の利のために用いようとします。「人々がそう言っている」「人々がそう望んでいる」「人々がそう判断している」「人々がそう決定している」「人々がそのように認めている」「人々が………」ピラトも、その声を超えることが出来なかった。その声の幻想であることを見通すだけの眼力をもっていなかった。このことは、ユダヤの宗教的権力者に於ても同じであり、民衆に於ても同じことが言えます。

そして、今も昔もこの様は少しも変らない。

56

「兵卒たちはイエスを十字架につけてから、

その上着はとって四つに分け、

おのおの、その一つを取った。」

(ヨハネ福音書 19章23節)

智者も善者も浮世を見るに、色と金には皆迷う。(白隠) 皆迷う。とは、皆迷う。という

ことであって、決して例外はない、ということですよ。

・善人はいない、ひとりもない。……すべての人は迷いで……」（ロマ3・10）とパウロも、ひとりもない、すべての人は」と申しています。人間というものについて、ここまでハッキリすると、かえってスッキリするものです。

しかし、スッキリするというのが、居直りであってはスッキリとは申せません。つまり、皆んな同じではないか、何が善だ、何が悪だ// というのではスッキリとは申せません。なぜならば、スッキリとは、ものごとの全く残っていない状態を言うのであって、居直りの態度は、もうひとつ納得がいかなぬところを多く残しているからです。

多くの人は居直りも出来ず、だと言ってスッキリも出来ずに、モヤモヤとした状態にいるようです。つまり、善をしようとすれば悪が生じ、悪に走ろうとすれば善が追かけて来る。信じようとすれば疑いが生じ、疑いに走ると信じようとする思いが引っぱる。右に行けば左、左に行けば右がそれぞれ引っぱる。このような心が、迷う心”なのです。（ロマ7・17〜23）この迷う心が罪人の姿なのです。ですから「善じゃ悪じゃと目に立つ内は、恥じて修行を精出しやれ」と白隠は言うのです。

・善じゃ、悪じゃ、と迷っていてはいつまでたっても救われません。大切なことは、迷っている自分自身をそのまま、そっくり無条件に包んで下さる神のご愛の中に投げ込むことなので

す。投げ込むとは、無条件に包んでいて下さっている現実を目覚めることを言うのであって、何かをするということではありません。

神のご慈愛は実にわたしの只中にあるのです。すでにあるものをあると認めることを、目覚めるといふのです。(ルカ17・21)

友よ、あなたは、何によって自分の人生をスッキリさせているのか。

*

十字架の上でイエスさまは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたと、マルコは記しています。(マルコ15・34)これは、正に、わたしたちの想像を絶する十字架刑という苦しみによる断末魔の中の叫びであります。

昔から、このイエスさまの苦しみの叫びについて、教会や聖書学者は、弁解がましい解釈を多くして来たし、今もどの注解書を見ても、もつともらしい解釈をつけて、弁解にこれつとめています。その理由はただ一つ、神の子であるイエスさまが、そんな不信仰な言葉を口にすはずがないし、あつてはならない、という信仰？によるのです。これは言うなれば、ひいきの引き倒しひというたぐいであつて、いずれのほとんどの聖書注解書がこの態度なので、ひから本当に困ってしまいます。

教会やそれにつかえる神学者は勝手な信仰の論理で、イエスさまを解釈してはいけないと思います。

いつも申しますように、痛いものは痛いのです。イエスさまであろうが、なかるうが同じなのです。ましてや十字架刑という、人間の歴史上最も残酷といわれるその中で絶望的な言葉を口にしたからといって、それを口にした人の品位がおちるとか、無くなるとか考えるなら、その人はイエスさまに対する見物人なのです。

一体信仰とはどういうことなのでしょう。それは、決して、神がいて、人間がその神に向かって何かをすることではありません。神に向かってよく生きようとして、自分の過去の罪を悔いて回心したり、神に助けを求めたりすることではありません。そんなことを信仰と思ひ込んでいるから、どこかおかしくなるのです。

信仰とは何か、それは、わたしたちの側のすべてのことにかかわらず、神のお恵みが、昔も今もこれからも、いつまでも、現在わたしたちの足下にあるということに気付くということです。

*

痛いものは痛い、にもかかわらず、痛いものを、痛くない、ように思わねばならぬのが、

信仰ではありません。信仰があるがなかるうが、痛いものは痛いのです。ですから、痛いものを痛いということは、不信仰ではなく、そのこと事態は、信仰とは関係のないことなのです。にもかかわらず、信仰者はときとして、痛くも痒くもないような顔をすることによって、自分の信仰が保てたと思ひ込んでいる場合がある。信仰は、がまんごっこではありません。

「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」。(ルカ5・31)とイエスさまは申されましたが、このお言葉によくよく耳を傾けると、イエスさまが信仰の何たるかということをし、どのように考えていられたかが、よくわかります。

罪人とか義人とかいう言葉は、ややもすると観念的な言葉になりやすいものですが、健康な人とか病人という言葉は、より自分にとって現実的です。つまり、イエスさまは、あなたは病人です、と申されるのです。病人であるということは、健康な者ではないということです。

病人にとって大切なことは、自分が病人であるという自覚をもつことです。自分が病んでいゝるのに、健康だと思ふことは、病状をますます悪くするのみです。病人が病人であると自覚するとき、安心して痛いものは痛いと言えようになるのです。

痛いの痛いと言わず、痛くないときに痛いと言うような病人がいたら、その病人は変な病人だといえます。そんな病人は医者泣かせで、ついには、最も適切な処置をとることができず、

病はいよいよ重く悪化していくにちがいありません。

*

「自分の生命のことで思いわずらうな」(マタイ6・25と34)とイエスさまは申されます。それは、「だれが思いわずらったか」と、自分の寿命をわずかでも延ばすことが出来ようか(マタイ6・28)ということを知っておられるからです。

大切なことは、「思いわずらうこと」を止めることではありません。「思いわずらい」の出で来る根を、たち切ることです。根をたち切るということは、命の根源に目覚めるということにほかなりません。

不安な時に、その不安をいくらかき消そうとして、食べても飲んでも、また歌っても踊っても、決して不安は消えません。不安を消すためには、不安を生み出す根を断ち切ることです。断ち切るとは、不安が最早不安ではないのだというところに気づくことです。

もう少しのことについて一歩すすめて考えてみましょう。

実は、「思いわずらい」ということは決して「無くなる」ものではありません。「思いわずらう」という出来事は、わたしたちが生きている限り必ずつきまといつて来るものです。そこで、思いわずらいの「根を断ち切る」ということは、思いわずらいがあっても「最早思いわずらわ

なくてよいのだ」という事に目覚め、気づく事をいうのです。例えば、少しケガをすると血も出て痛みもするが、決してそのきずのために死ぬことはない、動けなくなってしまふことはないのだということに目覚め、気づいていけば、そのきずの痛みや不安は根本的に断ち切られてゐるのです。

*

ヨハネ福音書は、「イエスは、『すべてが終った』と言われ、首をたれて息をひきとられた」と、イエスさまの最後のすがたを語っています。この「すべてが終った」とは、「すべてが完成した」というような意味と内容があります。(十字架の死が完成だという考え方のうちには、伝統的キリスト教の考えが、そのうちにあるのですが、それとは別に) イエスさまにとっては、満開の花が散って行くさまであり、熟した樹の果が地上におち行くさまとしての完成であったのではないかと思えます。

いかなる極度の苦しみにあつても、最後の「しゅん」に必ず、深い平安が来るものです。その時に、人は本音を表すのです。イエスさまは「完成した」と申されたのです。この言葉は正に、死を生きるイエスさま自身の姿です。もともと、イエスさまにとって、ご自分の生死など無いのです。否、生死など無いのが事実にもかかわらず、人は、すべてに生とか死とかを分別に

よって定めてしまったのです。そして、それ以外に事実はない、と信ずるに至ったのです。

十字架の死はイエスさまにとって生の一つの完成であり、命の輝きであり、永遠の一部分なのであります。それを人間が勝手に「人間の罪のための死」と受けとろうが、「人間へのイエスの愛」と理解しようが、その他どうでもよいのですが、大切なことは、そこに於て、命の事実を見ないならば、一切は空しいと申せます。この一点を指し示さずして、イエスさまの十字架を後生大事に担ぎまわるなら、これこそ正真正銘の偶像信者にほかなりません。

「すべてが終った」というイエスさまの言葉は、「一日の苦勞は一日で足れり、明日のことを思いわずらうな」(マタイ6・34)が、そのことを最もよく示してくれています。

みちしるべ文庫二八号
続々々・人間の道 一命への開眼一

一九八五年九月一日 第1版発行
二〇〇二年五月一日 第2版発行
二〇一一年二月一日 第3刷発行

著者 松 下 昌 義
